

元曲公案劇の構成

——事件への手続き——

はじめに

前稿に引き続き、冤罪事件を中心テーマとする八作品を取り上げ、元曲公案劇の類型化について考える。本稿では事件への手続きについて見ていくことにする⁽¹⁾。

題材とする作品は以下の通り。

「旦本」（女主役本）五篇

- ①「救孝子賢母不認屍」（元曲選本）
- ②「包待制知賺灰闌記」（元曲選本）
- ③「感天動地竇娥冤」（元曲選本・古名家雜劇本・酹江集本）
- ④「錢大尹智勘緋衣夢」（脈望館鈔本・古名家雜劇本・顧曲齋本）
- ⑤「清廉官長勘金環」（脈望館鈔本）
- 「末本」（男主役本）三篇
- ⑥「神奴兒大鬧開封府」（元曲選本）

元曲公案劇の構成（村上）

村 上 公 一

⑦「河南府張鼎勘頭巾」（元曲選本・古名家雜劇本）

⑧「張孔目知勘魔合羅」（元曲選本・元刊本・古名家雜劇本・酹江集本⁽²⁾）

—

事件が起き、それが公の場に引きずり出されることによって、公案劇は成立する。では、事件は何の前触れもなく突然やって来るのだろうか。「魔合羅」の舞台は次の場面（楔子）から始まる。

「沖末扮李彥實引淨李文道上」「詩云」月過十五光明少、人到中年萬事休、兒孫自有兒孫福、莫爲兒孫作馬牛。老漢姓李名彥實、在這河南府錄事司醋務巷住坐。嫡親的五口兒家屬。這個是孩兒李文道、還有個姪兒李德昌、姪兒媳婦劉玉娘、姪兒根前有個小廝、叫做佛留。姪兒如今要往南昌做買賣去、說今日來辭我。怎生這早晚還不見來。

「正末扮李德昌同旦・俵上云」自家李德昌是也。這個是渾家劉玉娘、這個是我孩兒佛留。我開着個絨線鋪、這對門是我叔父李彥實、有個兄弟喚做李文道、乃是醫士。我在這長街市上、算了一卦、道我有一百日災難、千里之外可躲。我今一來躲災、二來往南昌做些買賣。大嫂、咱三口兒辭叔父去來。

「沖末、李彥實に扮し、淨李文道を引き連れて登場」「詩せりふ」月は十五夜を過ぎれば欠けはじめ、人は中年になれば万事終わるになる。子孫には子孫の福がある、子孫のために牛馬となることはない。それがしは姓を李、名を彥實と申す。ここ河南府の録事司醋務巷に居住し、家族は五人、これは息子の李文道、他に甥の李德昌とその嫁劉玉娘がおり、甥のところには佛留という子供が一人いる。甥はこれから南昌に商いに出かけようとしており、今日暇乞いに来るといっておったが、どうしてまだ来ないのだろう。」「正末、李德昌に扮し、旦・俠と登場、せりふ」それがしは李德昌でござる。これは女房の劉玉娘、これは息子の佛留。それがしは糸屋を開いており、この向かいには叔父の李彥實のところで、李文道という従兄弟がおり、こちらは医者をしております。それがしこの大通りで占ってもらったところ、「我に百日の災いあり、千里の外に避けよ」と出た。そこで、これから一つには災いを避け、もう一つには南昌に商いに出かけることにした。さあ、わしら三人で叔父さんのところに暇乞いに行こう。

まず、李彥實が息子の李文道を引き連れて登場し、続いて甥の李德昌が妻の劉玉娘、息子の佛留を連れて登場する。李德昌は百日の災いの卦が出たため、厄除けのため南昌に商いに出かけることになり、叔父に挨拶に来るといふ場面である。ここに登場した五人が事件の舞台となる李家の全構成員である。

この幕の最後で、劉玉娘は旅立つ夫に対して心配事を打ち明ける。

「（正末）做出門科、旦云」李大、你今日做買賣去、我有句話敢說麼。

「（正末云）有何說。

「（旦云）小叔叔時常調戲我。

「（正末怒云）噤聲。我在家時不說、及至今日臨行說這等言語。大嫂、再也休提。你則好看家中、小心在意者。

「（正末）門を出るしぐさ、旦せりふ」おまえさん、今日商いに行つてしまうので、私にはちよつと言つてしまいたいことが有るんだけど。

「（正末せりふ）どんな話だい。

「（旦せりふ）従弟さんがいつも私にふざけに来るの。

「（正末怒つてせりふ）だまりなさい。わたしが家にいる時に言わないで、今日旅立つ時になつてそんな事を言い出すとは。おつかあ、二度と口にするなよ。お前は、ただちゃんと家の事を看て、注意深くしてれば良いんだよ。

この一家には隠れた問題があった。それは李文道の、従兄の妻劉玉娘に対する横恋慕である。李德昌は従弟の問題に言及した妻をたしなめ、そのまま旅立っていく。引用の場面の後、李文道に留守宅に行かないように注意する父親李彦實の言葉があつて、この幕は終わる。しかし、劉玉娘のこの懸念は、へ李德昌の旅立ち「不在」で一氣に具体的なものになる。

次の幕（第一折）では、劉玉娘が店番をしているところに、李文道が登場する。

〔旦上云〕妾身劉玉娘是也。有丈夫李德昌販南昌買賣去了。今日無甚事、我開開這絨線鋪、看甚麼人來。

〔李文道上云〕自家李文道便是。開着個生藥鋪、人順口都叫我做賽盧醫。有我哥哥李德昌做買賣去了。則俺嫂嫂在家。我一心看上他。爭奈俺父親教我不要往他家有。如今瞞着父親、推看他去、就調戲他、肯不肯不折了本。來到門首也。我自過去。〔見旦科云〕嫂嫂、自從哥哥去後、不曾來望得你。

〔旦云〕你哥哥不在家、你來怎麼。

〔李云〕我來望你吃鍾茶。有甚麼事。

〔旦云〕這廝來的意思不好、我叫父親去。父親。

〔李彦實上云〕是誰叫我。

〔旦云〕是您孩兒。

〔李彦實云〕孩兒、你叫我怎的。

〔旦云〕小叔叔來房裏調戲我來。因此與父親說。

〔李彦實見科云〕你又來這裏怎的。〔做打、李文道下〕

〔李彦實云〕若那廝再來、你則叫我。不道的饞了他哩。我打那弟子孩兒去。〔下〕

〔旦云〕似這般幾時是了。我收了這舖兒。李德昌、你幾時來家。兀的不痛殺我也。〔下〕

〔旦登場、せりふ〕私は劉玉娘でございます。亭主李德昌は南昌に商いに参りました。今日は何も無いので、糸屋の店を開けてみて、どなたかいらっしゃるか見てみましょう。

〔李文道登場、せりふ〕それがし李文道でございます。生藥屋を商つていて、皆は私の事を賽盧醫（やぶ医者）と呼んでいます。兄の李德昌は商いに行き、ただ兄嫁だけが留守番しております。わたしは一心に彼女のことを思っているのに、いかんせん、うちの親父があちらの家に行かせてくれぬ。今やつと親父をだまして、彼女のところに押しかけて行つて、からかつてやろう。言う事を聞こうが聞かまいが、元手は減るものでない。門口までやつて来た。自分で入つて行こう。〔旦を見るしぐさ、せりふ〕義姉さん、従兄さんが出かけた後、ご無沙汰をしておりました。

〔旦せりふ〕あなたの従兄さんは留守ですが、家に来たのはどういうわけです。

〔李せりふ〕あなたにお茶を一杯飲ませてもらいに来ただけです。

別に何もありません。

「且せりふ」こいつがやって来たのは邪まな考えでだ。私はお義父さん呼びに行こう。お義父さん。

「李彦實登場、せりふ」わしを呼んだのは誰だ。

「且せりふ」あなたの義娘（むすめ）です。

「李彦實せりふ」むすめよ、わしを呼んだのはなぜだ。

「且せりふ」義弟さんが家に来てわたしにふざけるのです。だから、お義父さんに言いに来たのです。

「李彦實見るしぐさ、せりふ」お前はまたここにやって来て、どういうわけだ。「打つしぐさ、文道退場」

「李彦實せりふ」もしあいつがまた来たら、お前はすぐわしを呼びなさい。決してあいつを許しはしないから。わしはあのまぬけを

打ちのめしてやる。「退場」

「且せりふ」こんな状態は一体いつになったら終わるのかしら。店じまいをしましょう。李徳昌、あなたは一体いつ帰って来るの、

本当に私を悲しませないで。「退場」

李徳昌の留守をいいことに、李文道は店番をしている劉玉娘のところに遊びにやって来る。劉玉娘は李彦實に助けを求め、李文道は父親にこつぴどく叱られる。

引き続き、舞台には、南昌での商いを終え、帰郷を急ぐ李徳昌が登場する。雨に打たれ、風邪を引いて動けなくなった李徳昌は通りすが

りの魔合羅売りに、家族への伝言を頼む。この魔合羅売りの伝言を聞いた李文道が先回りをして李徳昌を毒殺する。目的は劉玉娘を自分のものにするため。これが、「魔合羅」の事件である。

まず、これまで矛盾を抱えながらもそれが顕在化することなく、平穩を保ってきた一つの家族がある。その構成員の一人が不在になることによって、その家族が不安定な状態になり、抱えていた矛盾が顕在化して、一気に事件へと発展する。これが、「魔合羅」の事件の前提である。

二

構成員の一人の不在が事件の前提となるのは、他の作品にも見られる。

「救孝子」の第一幕では、沖末王儵然による開場の後、正旦李氏が二人の息子楊興祖、楊謝祖、興祖の妻王春香を引き連れて登場する。これが楊家の全構成員である。そこに、王儵然が再び登場し、楊謝祖を軍務に連れて行く。こうして、母親、次男、長男の妻という不安定な関係の家族が残される。事件はこの後、楊謝祖が王春香の里帰りを送って行ったところから、発生する。事件は王春香殺害、被告は楊謝祖。

「灰闌記」の第一幕では、老旦劉氏が娘張海棠と登場し、続いて息子張林が登場する。これが、張家の全構成員である。生計を立てるため海棠が馬均卿の妾になることになり、それをいやがる張林が家を出て都にいつてしまう。海棠の嫁ぎ先で事件は発生する。事件は馬均卿殺

害、被告は張海棠。

「寶戒冤」の第一幕では、卜兒蔡婆が登場し、続いて寶天章が娘端雲（正旦、後の寶娥）を引き連れて登場する。寶天章は借金のかたとして、端雲を蔡婆の家に嫁としてやり、都に科擧の試験を受けに行く。さらに、蔡婆の息子、つまり端雲の夫の死があり、二重の不在の中で事件は発生する。事件は蔡婆の再婚の夫張老殺害、被告は端雲（寶娥）。

「勘金環」の第一幕では、沖末李仲義が妻王臘梅と登場し、一旦退場する。続いて李仲義の兄李仲仁が妻の孫氏（正旦）、息子福童、妻の弟孫榮と登場する。これが李家の関係者全員である。再び登場した李仲義夫妻は、兄夫婦に孫榮を家から追い出すことを求め、孫榮は、都に科擧の試験を受けに行くことになる。孫榮が不在になった時に、この二組の夫婦の間で事件は発生する。事件は李仲仁殺害、被告は孫氏。

「神奴兒」の第一幕でも、沖末李德義が妻王臘梅と登場し、一旦退場する。続いて正末李德仁が妻陳氏、息子神奴兒と登場する。これが李家の家族全員である。再び登場した李德義夫婦は、兄に、兄弟での財産分けか陳氏との離婚かの二者択一を迫り、李德仁は憤りのあまり死んでしまう。李德仁の死後、残された家族の間で事件は発生する。事件は神奴兒殺害、被告は陳氏とその下僕院公。

以上の五作品では、いずれも、芝居の冒頭で家族全員が登場する場面が用意され、その内の一人の旅立ちあるいは死亡が演じられる。つまり、事件の前提として、一つの家族があり、その家族の構成員のうちの一人が不在になることにより、舞台は事件発生に向けて動き出す

のである。

「魔合羅」も含めて、以下のように図式化することが出来る。

①矛盾を抱えながらも平穏な家庭↓②構成員の一人の旅立ち、死去↓③矛盾の顕在化↓④事件の発生

「緋衣夢」「勘頭巾」の二作品は直接にはこの図式には当てはまらない。「緋衣夢」の第一幕では、沖末王得富が娘の乳母と登場し、一旦退場する。続いて王得富の娘の婚約者の父李榮祖が登場する。そこに王得富の娘の乳母が再び登場し、娘が作った靴と十兩の金で婚約の解消を求め、退場する。李榮祖の息子李慶安が帰宅し、送られた靴を受け取り、風を買うためのお金をもらい退場する。次の幕では、李慶安が登場し、王得富の家の庭に入り込み、木に引っかかった風を取ろうとする。そこに王得富の娘王閨香（正旦）が下女梅香を引き連れて登場する。ここまでは家族の関係者は全員そろう。事件は婚約の解消をめぐる発生する。事件は梅香殺害、被告は李慶安。

「緋衣夢」では②（構成員の一人の旅立ち、死去）の部分が欠落している。これに相当するものとして語られているのは、「婚約の解消」である。構成員の一人が欠けることと「婚約の解消」に共通するのは、いずれもそのことにより家族をめぐる状況が大きく変化することである。②を「家族をめぐる状況の変化」として大きく捉えれば、「緋衣夢」もこの図式に当てはまることになる。また、家族の関係者が全員登場

する段階で、既に②が始まっているわけであり、①と②がひとまとまりになっている。

「勘頭巾」は更に様相が異なっている。「勘頭巾」の第一幕では、王小二が登場し、続いて劉平遠の妻が登場し、二人の間で口喧嘩が起こる。続いて正末劉平遠が登場し、王小二との口喧嘩に加わる。この口喧嘩がきっかけとなり、事件が発生する。事件は劉平遠殺害、被告は王小二。

これまで見てきた作品では、被害者、被告が全て家族の一員であった。事件の関係者は全て家庭内の人間であり、事件の原因も偶然出会った賽盧醫が事件に絡んでくる「救孝子」以外は、全て家庭内にその原因があった。

この作品では、被告に家族以外の人間が当てられている。家庭の中で起きた事件に部外者が巻き込まれる形になっている。舞台は、部外者が事件の起こる家族と出会うところから始まる。この出会いにより部外者は家族の（敵対）関係者に仕立て上げられる。このことは「家族をめぐる状況の変化」と見做すことが可能であり、この変化を利用して事件が引き起こされる。この作品でも王小二を含めた家族の関係者全員が登場する場面がとりもなおさず②「家族をめぐる状況の変化」に当たるわけであり、①と②がひとまとまりのものになっている。

三

さて、事件発生的前提としての「構成員の一人の旅立ち、死去」あるいは「家族をめぐる状況の変化」は、事件解決とも深く関わってくる。まず、構成員の一人が旅立つ形の四作品（「救孝子」「灰闌記」「寶娥冤」「勘金環」）を見ていく。

「救孝子」では、第一折で長男楊興祖の旅立ちが演じられた後、楔子で、弟謝祖による兄嫁春香の里帰りの見送り、賽盧醫による春香の誘拐が演じられ、更に第二折・第三折で、春香の衣服を着た女性の死体の発見、謝祖の逮捕、取り調べ、拷問の上の自白が演じられる。事件は第四折で解決を見る。第四折は賽盧醫の登場から始まる。

「浄賽盧醫拏棍領旦兒挑水桶上」〔賽盧醫云〕自家賽盧醫的便是。

自從拐將這個婦人來、他百般的不肯順我、更待干罷。白日裏五十棍、到晚也五十棍、每日着他打水澆畦、我直折倒死他。春香、我如今吃杯酒去、回來打死你也。〔下〕

〔旦兒云〕自從被這賊漢拐將我來、爲我不隨順他、朝打暮罵、着我打水澆畦。我待要告他、爭奈走不出去、似此怎了也。

〔楊興祖領隨從上云〕自家楊興祖的便是。自拜別了母親、得了王爺大人一封信、見了兀里不罕元帥、看罷書呈、元帥大喜、不着我做散軍、就着我做領軍的頭目。托祖宗餘蔭、到於陣上、三箭成功、做了金牌上千戶。我今元帥根前、告了假限、回家探望母親去。小

校、遠遠の一眼井兒、就着婦人的水桶、與我飲馬者。

「旦兒驚科云」兀的不是楊大。

「楊興祖云」兀的不是大嫂。

「旦兒做哭科」「楊興祖云」大嫂、你怎生到這裏來。

「淨賽盧醫、棍棒を持ち、水桶を担いだ旦兒を引き連れて登場」「賽盧醫せりふ」それがしは賽盧醫でござる。この女をかどわかして来てからこの方、この女はどうにもわしの言う事を聞こうとしな。このままでは済ましておけぬ。昼間五十回棍棒で打ちのめし、夜も五十回。毎口水汲み、水撒きをさせ、死ぬまで痛め続けてやる。春香、わしはこれから酒を飲みに行ってくる。もどつて来たらお前を打ち殺してやるからな。〔退場〕

「旦兒せりふ」この悪者にかどわかれて来てこの方、わたしが言う事を聞かないものだから、朝な夕なと罵り棒打ち、水汲み水撒きもさせられる。わたしはあいつの事をお上に訴え出たいのだけだ、いかんせん出て行く事が出来ません。こんな状態はどうしたら終わるのかしら。

「楊興祖、従者を引き連れて登場、せりふ」それがしは楊興祖でござる。母親に暇乞いした後、王脩然殿が手紙を書いて下さり、元里不罕元帥に面会いたした。この書状を読まれると、元帥は大いに喜ばれ、それがしを一介の兵士とはせず、兵士を纏める頭目として下さった。ご先祖の御蔭をこうわり、陣中に至っては、戦で功をなし、金牌上千戸に昇進いたした。それがし今、元帥の御前

で休暇の許しを頂き、母親を見舞いに帰省するところだ。お前、遠くに見えるのは井戸だな。あの女の水桶を借りて、わたしの馬に水をやってくれ。

「旦兒驚くしぐさ、せりふ」この方は楊大さんでは。

「楊興祖せりふ」こいつは女房では。

「旦兒泣くしぐさ」「楊興祖せりふ」女房よ、お前は どうしてこんな所に来てゐるのだ。

この場面、賽盧醫は春香を引き連れて登場する。賽盧醫が一旦退場し、春香が一人井戸端で水を汲んでいる所に、旅に出て不在だった楊興祖が従者を連れて登場する。春香の水桶で馬に水を飲ませようとしたことから、二人は再会を果たす。この場面の後、春香からいきさつを聞いた楊興祖は賽盧醫を捕らえて、故郷に向かう。

次の幕は、事件の舞台である河南府にやって来た王脩然が、事件の再審を行う場面。王脩然が、被告楊謝祖とその母親李氏等を前に、楊謝祖の無実を感じつつもどう判決を下したら良いか悩んでいるちょうどそこに、楊興祖が春香を連れて登場する。これにより事件は一気に解決し、関係者一同そろった中で、王脩然による判決言い渡しがあり、芝居は終了する。つまり、楊興祖の旅立ちから始まった楊家の事件が楊興祖の帰郷で終結するのである。また、再審を担当する王脩然も、第一幕で登場し、楊興祖とともに姿を消していた人物であり、その人物の再登場により事件は解決に導かれている。

「灰闌記」は、楔子で、張林が旅立ち、海棠が馬均卿の妾となった後、第一折で、張林の一時帰郷と再度の旅立ちが演じられ、そのすぐ後に馬均卿殺害の場面となる。第二折で、海棠は拷問により罪を自白し、第三折で開封府への護送となる。この護送中に開封府の下役人となっていた張林と出会う。この出会いにより事件は解決に向かう。

「寶娥冤」では、冒頭の別れの場面（楔子）の後、第一折で、事件の元凶となる張親子との同居、第二折で張老殺害及び寶娥の取り調べと自白、第三折で寶娥の処刑が演じられる。そして、第四折で寶天章が役人として帰郷し、事件の再審を行うことで事件は解決する。

「勘金環」では、冒頭の場面（楔子）で孫栄が追い出された後、第一折で李氏兄弟の財産分け、第二折で李仲仁の死、第三折で孫氏の取り調べ、自白が演じられる。そして、やはり第四折で役人となった孫栄が帰郷し、事件の再審を行うことで事件は解決する。

以上の四作品は全て、旅立った家族の一員が帰郷することによって事件が解決する。つまり、家族の一員の旅立ちが事件発生の前提となり、その帰郷が事件解決の前提となっているのである。先に見た部分と合わせて、次のような図式化ができる。

①矛盾を抱えながらも平穏な家庭→②構成員の一人の旅立ち、死去→③矛盾の顕在化→④事件の発生→⑤構成員の帰郷→⑥事件の解決

「魔合羅」も家族の一人が旅立つことから事件が始まる。しかし、この作品では、その旅立った人物そのものの死が事件となる。したがって⑤「構成員の帰郷」は実現しない。

この作品では、正末は楔子から第二折まで李徳昌に扮し、李徳昌の死後（第三折、第四折）は張鼎に扮する。殺害される李徳昌と、事件を解決に導く取り調べをする役人を同一人物が演じることになる。観客の目には、李徳昌と張鼎はある意味では重なり合い、李徳昌のイメージのいくらかは張鼎に引き継がれていくことになる。つまり、李徳昌の不在を事件発生の前提、張鼎の登場（＝李徳昌の帰郷）を事件解決の前提と見做すことができ、他作品と同じ構成になっていることが分かる。

このことは、家族の構成員が死亡により不在になる「神奴兒」にも当てはまる。「神奴兒」では、第一折で死亡する李徳仁に扮した正末は、第四折では、事件の再審に当たる包拯に扮する。ここでも、李徳仁の不在を事件の発生の前提、包拯の登場（＝李徳仁の復活）を事件解決の前提と見做すことが出来る。

最後に、②の要件が他作品と異なっている「緋衣夢」と「勘頭巾」の事件解決について見ることにする。「緋衣夢」における②「構成員の一人の旅立ち、死去」は「婚約の解消」という家族をめぐる状況の変化である。しかし、ここでは、婚約解消の取り消しが事件解決の前提とはなっていない。真相が明らかになった後、開封府尹錢可は判決の

中で次のように述べる。

〔官人云〕……將老夫俸錢給與李員外、做個慶喜的筵席、着李慶安夫婦團圓。

〔官人せりふ〕……それがしの俸給を李員外に与え、婚礼の宴席を設けさせ、李慶安夫妻と一緒にさせる。

この判決により、婚約解消が取り消され、二人は当初の予定通り結婚することになる。「家族をめぐる不安定な状況」は、事件の解決と同時に解消され、元の平穏な家族に戻る。

「勘頭巾」では、他作品と違い、部外者が一つの家族と出会うことにより、「家族をめぐる不安定な状況」が生じたのであるが、これも最後を示される河南府尹完顔の判決で次のように述べられている。

〔府尹云〕……將劉員外家私給付王小二管業。

〔府尹せりふ〕……劉員外の家の財産を王小二に与え、管理させる。

この判決により、事件の舞台となった劉家の財産はそっくり部外者である王小二が引き継ぐことになる。劉家と王小二の出会い、つまり過剰によって不安定になっていた状態が、劉家が消滅し王小二だけが残るという形で過剰な状態が解消されたことになる。ここでも、事件の解決と同時に「家族をめぐる不安定な状況」も解消されている。

この二作品では、①と②だけでなく、⑤と⑥もひとまとまりのものになっている。

おわりに

以上、本稿では、事件が家族をめぐる一定の流れにしたがって発生し、解決していることを確認した。この家族をめぐる大きな流れに、前三稿で考察した諸要素が絡み合って一編の公案劇が形作られているのである。

〔注〕

- (1) 本稿は「元曲公案劇の構成―事件・人物関係・配役―」（『福井大学国語国文学』三十 一九九二・元曲公案劇の構成―冤罪への手続き―）（『福井大学教育学部紀要 人文科学（国語学・国文学・中国学編）』四十 一九九二）・「元曲公案劇の構成―釈冤への手続き―」（『名古屋大学中国語学文学論集』十一 一九九七）の続編として書かれたものである。
- (2) ④「排衣夢」⑤「勘金環」が脈望館鈔本による以外は原則として元曲選本による。